昔語質屋庫卷之三

初篇

へ13
3394
3

門ベ 13
3394
3

昔語質屋庫 巻之三

東都 曲亭馬琴演述

俵藤太が龍宮入の弓袋の下

弓袋へつゞらをゝ。聞んとゝろりの爰ゝる小精はてゞ。おづきゞゞゝふ一碗乃茶を喫ゝ。襟かれゝゝて。組る角ゝ。小膝ゝ扇を衝ゝろゝ。ゝ童の弄物。婦人衣裳ゝ入ゝ。ゝゝも小燈燭の下ゝ居ゝらんとて。席のすゝゝ紙ゝゝゝゝゝ。當下弓袋聲ゝふゝゝゝ。ゝゝ彼秀郷ぬゝゝ。湖水ゝゝ。龍王の座ゝ。ゝゝて殺ゝ。ゝゝ。巨蟒蚣のゝゝ紙取て。世俗附會の説ゝゝ。件の蜈蚣ゝ。近江の三上山を。七圍半ゝゝゝ。三上山ゝ。石部ゝ草津の間ゝ地ゝゝゝ。二十町ゝゝゝ。この山の巔の。四ゝゝ。外ゝゝ。ゝ蔭ゝ巖穴ゝゝ。ゝ門ゝ僅ゝ二尺ゝゝゝ。内ゝ究めて廣ゝ。一名を蜈蚣山ゝゝ。蜈蚣ゝ

るんどいへば。土差八頭を掉。也とういへ蜈蚣山八三上山のこふあるべ。瀬田うり一里ばかりふ小山あり。秀郷ふ射られ蜈蚣八。こふ也といふたれて當時ふ服前。えさうりこ。ていひ浄へど。彼軍記ふ八。比良の高峯のかくうりとあるとこもえいどまで。蜈蚣の古蹟三味とる。いとくとさるのれ。山りて。只頑ふ我と推せ八。浄ふ王も爰ふ八。さられ秀郷ねが。蜈蚣射るとい陽といふおらで其弓矢もありねへれど。湖水の底ふ。龍宮とるの。その龍宮といふ所が。湖水の中ふなるへ八。其外を攻て取らんとせ。蜈蚣も亦のとさべ。何をもて湖水ふ。龍宮はうへといふるべ。和漢の俗説ふ。琵琶海の中ふて。龍王宮へありといふるれ。もるとこ近江の湖水八海へつゞくるる入江もあるんのへ。この湖水ふ。湖ろ相應る。龍宮城ありといふ。諏訪の湖水ふも龍宮あるべ。諏訪の湖水ふも龍宮あべ。印幡の沼ふも龍宮のれべ。かの龍宮ふ八出店あるとを吹ざれば。

いとゝ八つるれとなるらるもの。さん是龍王宮といふとハ唐山の俗も公然と。常ふ口順とるとこと是さく。彼知の博士のいへるのあり。蘇州の東を海ふ入ると。五六日が行ふて。ふるる鴻あり。濶百餘里が間へ海水とる濁れども。ひとろ。このところの水清く。浪高さと数丈なり。こふ八常ふ海上ふ紅光のゞ〜あるとゝるるのあるべとく。舟人あゝく近つゞ。こを龍王城ことゝいふる。さるも西北の塞外ふて。人の到らぬ処ふて。時ふのゞして数十人の。砍樹。拽木の声とるとあり。天のゆる隨ふ遠望れば。彼海の山の木八ゞく。伐去ら是ゝ一株もなゝ。これ海龍王の宮を造ることゝいふ。博士これを浮ふらく。余おりふ。龍八水をもて居とするものなるふいゝでゝ別イ。宮殿樓閣のあるとおらん。縱ことあるとゝいふとも。鮫宇貝闕ふて。人間の如くふ八あらじ。必人間のゞくなるべ八。水を拽て何ゝるそせん愚俗の

不経のことなるものなり。五雑組 又一説あり。奇地記といふものは平昌城といふところより井あり。その水荊水と通ず。神龍有て三年より出ず。故に龍城と名づくといふ。暦確類書 その書に載る如く。堀抜の井戸をさら。龍城と名つけんあり。湖水の中といふとも。龍宮の一説にはくけまで。件の博士が評せーどく。龍はよろづ人と異なり。果して人とおなじからざるその居も亦必人間にある所の宮殿楼閣あれば。べうらべ。おろる小秀郷朝臣の到りしといふ龍宮城は。瑠璃をもて葺と。金玉をもて甃と。朱門高楼。帝王の宮闕に勝れりといへば。人間と異なんぞ。おりしも湖水の神龍が。形状を変じて小男となり。秀郷ぬ一汎導せーと いふなれば。彼宮殿も。真の宮殿みなあれど。又浪をもて水をもてしること五十余町とぞひーも。実へ水中ゐあべうんぞ。人り一水中に没て。えーれとさへ必死ぞ

といふものなりや。龍王の神通ふるうて。浪を披きて湖水を陸のごくなる王のうとも。数日旱乾とふあべば。泥土深くして渡りかたうべ。されども楼閣も水中も。みな假物ゆへ。狐狸の人を魅せるよ。異なることとする。えへ。秀郷朝臣は武勇もるの。只碎客。癡漢なんどの狐狸よりこれーどく。世よ虚気なる人といふん。扨。秀郷朝臣は双の弓なり。龍王の仇とする。蜈蚣を射て威風あべ。龍王神通自在なりとも。いかでこれを魅ーゆん。彼龍王もだに沼ぞ。湖水の浪をとられぐ。五十餘町もんと。撓といふものなく へ振へ。流りかかべ。夫海底に龍宮のありといふもさら。智ある人は信ぜせざるも。湖中に宮殿楼閣あるべーや。世俗は只耳を信じて目をいまーむ。後の俗り物語あいさてこのの取べきぶありても。ずーよいまめて。意よ惑ぞ。その主よ惑ざるは原物語なるほどを。初ようもれどもるふむ。の小説は。是非を

論ぜざと実言とを。古今の人情異なるとは。悉書を信ぜば書なるがゆへ
まことぞといへん。実は古人の金言なるべし。彼蜃氣樓などいふものこそ海
辺の人へとりくにまとをんとをりといふなれ。こは蜃といふなり。形螭龍ようく
似たるゆ。気を吐とあるとなん。その気空中へ立のぼりて。宮殿楼門画〻ごとく。
あらるとぞいふなる。唐山にては蜃楼とも又海市とも名つけたり。亦一説に。
蜃はその形。蛇の如くにして大なり。腰以下鱗ありとも。逆ぞとともいへ説あれば。
亦その状螭龍に似たり。角あり耳あり。鬣ありて。紅色といへ説もあり。又
雖と蛇と交まじへば。蜃を生とも呼へり。或は蜃は龍に。沈及井よりあがる
ゆ気を吐て雨とす。海にあるとは気を吐て。世俗乃
所謂龍宮城は蜃気楼を訛伝へてあるべしといふ。亦一説に。蜃
は是大蛤也。故に海中の車螯を。蜃といふとあるよりて。蜃をもかくまで

車螯ハ
時珍云
梵書謂
之牟婆
各揑拉
蛤

と訓りのあまたどこに古人の誤なり。りて蜃とありて。蛤の属とせべいなるべ
ようへ変化して人を害するに至るべきを。蜃とは二種あるゆ。海市蜃気樓と
なづけるのは。螭龍の属なり。亦雖は大水に入りて蜃となるといへり。雖は本。
蜃は蛤の化するとこそ。なれば。その類よりてこそ。ものをとるとはいへ。信
蜃気といふなりのは。海気也。大凡海水の精。尋へく結て形をなし。散て光を
なすことあるのを。蜃の気にはあらずとはいふ。一説に従へば。夏雲のさまぐ
なる。奇峯小似たるに等し。亦是あらく怪也。足らば。件の説を推とは。蜃
蜃気楼
雖者蜃
蛤の下に
大蛤を
誤なり

気楼とは。物のなるとは。水中の宮殿は何なりのことを似たん。
古人の寓言疑ひなし。さて彼秀郷朝臣は龍に請ひて。巨蟒蛇を射る
といへ物語も。本つく所あるべし。唐山の小説に唐の教家の宝歴年間
蔣武といふなりの。射獵とりて業とす。ある日。弩を携へ。矢を挾て。熊羆荒

薄武
白象の鳥
巴蛇を射る
ところ
將軍
猩猩
質屋庫巻三

豹ろんごと射る毎ふ弦よ慫じて咸。斃まざといふりの臣。かくて一タ忽北ふ門と叩くものあり。窺ふうに人まべ。一の握こ。白象に跨りて来ること。蔣武素よう握このうくものいふとまりてけまば。出てその故と問ふ。握こ答て。この象ふ大なる。怨のいひ。ゴゲようくりのいふとを知いこれとうく員へて来ぐ。その旋立を述ふとこ。この山の南。二百余里ふ。ていと大ふなる巖穴ふり。その中ふ巴蛇の長ハ数百尺なるあり。その眼ハ電光のごく。その牙ハ利劍のごく。若象のこのわこうと。過るものあるハ。咸吞噬こ。既ふ数百疋ふ及べり。今君がうく射るとまる。ふ。この愁許を抵さのこ願ハこれゲ讐と射てこの愁を除きのつ。長く高恩と忘まで。といふ。時ふ象ハ跪きて。坐ふ泪を流ぎこべ。握こ又いへ。君をくこと。沢許しのうくたまへとの象ふ跨りのこそいそがせべ。蔣武ふて感激。毒とりて矢ふ淬し。象ふ跨てせくに行く。

ひつる。山の巖の下ふ。おのれ。両の光ありて。数百歩の外ふ散徹を握ここれを指しに巴蛇の目のごとくもの。蔣武ふ。弓ふ矢刺ふ。ひつ引て射ると射るふ。一発しその目と射貫こ。象ハ忙しく。蔣武を負て奔走ふ避るふ。大蛇ふ穴の中こ。転生く。苦むと限ふ。かくハ数里こ間の林木。焚るが如く覚こ。且しに。穴の側ふ往て窺るふ。巴蛇ハ既ふ死しに。象の骨。積て山の如し。浩然ふ象。毀聚すく。ちのく。鼻をりて。紅牙を捲こりて。ふまこと蔣武ふ献まバ。蔣武ハ喜く。象牙を獲て家ようて。大ふ資産を有ぬとこて。巴ハ山海経ふ。巴蛇ふ象を食ふ。三歳ふして骨を出すといふ。ふ幸こそ。彼り出せ。物語とハ。ふ。ふ且ごも。象ハ。りのいひこと。ふ。握こを備ていふとこ。とこへ。大ふ。ふ。又到りこ。所ふへ。この蔣武を。秀郷朝臣と。象を。握こ

と龍の小男ふ化らそ。巖穴を湖水とし。矢ふ毒を率せしといふと。濱ふ唾を吐らひらと。象牙を巻絡。俵。鐘。大刀。瀧ふ。龍宮城一條の物語ふ似りえるるべし。ちうとても湖水の底ハ人の往むとぐこ知らねば。前の小說よりも。浅汁せんよりと浅ちるふ。少もとても。此意るるにあらべ。秀郷朝臣ハ。左大臣藤原朝臣魚名公の五男。從四位下伊勢守藤成朝臣の曾孫なり。藤成の子。下野權守豊澤。その子下野大掾村雄。その嫡男従四位下。下野押領使。藤太秀郷。母ハ下野掾鹿嶋が女なり。秀郷その子。下野の田原といふところに居ひしゆゑ。田原藤太と稱せ。藤太とハ。藤原氏の太郎を略ちて。或ハ大和の田原ふて生ぜしとの。近江の田原を須ゝ。いべとも。諸說一定ならざれども。秀郷の子。田原千春。千春ハ何ぞの書ふ田原

とのゝ書て。俵と書ちるを。えねば地名なるよ。ハらぶわざ。田原を俵ふ書ハ字を備ちるゝ。俵と称ちるふ注釋せんとて。件の蒔式ごとちひらて。さて龍宮城の怪談ふ出ぬ。ちうとても。俵の和訓たわらと。たちもちるの義ふて。米を暴むちちうふ。又米を裹巻結也。ちうらと和名せり。手束藁の略なり。ちうとても。いつの比よ備用て。俵の和訓を。手束藁ふ當ちる。字書ふ俵ハ。悲朝の切。音標。俵散なりとあり。ことをたちもちると和訓して。略して。ちうとの。ちうとハ手束藁ふ。俵の字を當ちるもちら。むろ」の人の根ちるふ。又田原の假字ふ。ひ米芙の義をちうてもちうとの假名ちがひあり。さて。この俵といふ苗字を。物語の主人公ふて。卷狐大刀。瀧撞を獲て。財宝金ふ充満し。衣裳その外ふ「あまり」と似りしハ。秀郷朝臣天慶

小貞盛ぬ〻を翼て。将門を討滅し。弓矢をとりてその家を興しられば。大力強へ。その武を表し。巻絹米俵へ衣食を子孫ふ伝ると表し。撞撞へ。武名四海ふ鳴るを表し〻ろ。ちろ丸原寓言とつくども。紙意あるふあらじそ。世俗の常談へ批さるふ足らねど。正史とつくども。小説を収さるあり。もろ〻の人も。兵亦とのを引そ。その本を究めど神代巻ふ倣てや。一書ふも亦。秀郷朝臣の龍宮ふ入らんを注くろ。こゝ〻へ後人の追書さるふのらんされば。と書つけ注く。可惜弓袋ふぬれ衣をば被せるとて。秀郷ぬ〻も冥土ふそ。さぞ心憂くおぼさめ。とそひあすも長物語も。芸ゝ心ふ入るり。誰ふもめ〻代〻のひろけて引退けど。衆皆ゆと散動めるろ。

第六　石堂丸高野詣の脚絆

己ノ袋ぶ高論ふ。ちべ〻感嘆して鳴も己ど。従書代引き流と辨じて。身のぬま衣をひたくゝも。こ丸ぶ右へハ出ぶ。と衆皆面とあらく溝坐へ推覆るのろ〻。見臺先生左右とうくゝひびひろ徒ろ。夜ゝ〻ゝ深るふるゆて抜隙ちのふぞや。十三番目の古衣棚ふ踏揚の泥の乾干るハ。世の人口ふ膾炙さる。加藤左門尉重氏入道の嫡男石堂丸の脚絆ろ〻ぶや。さても重氏入道ハ紙紫ふ名さる武士なりぶ。妻と側室ぶ。さ對ハ〻假寝ちるを闕覗ぶ。両個の婦ぶ黒髪の小蛇となりて。嗤あふよ驚嘆。外面如菩薩内ふ如夜叉と。忽地怖る不二法門。これを暮龍のたゝひはて。所領の地を棄。妻子を捐。恩愛恋慕の絆とともふ擯弃と勢そ〻ハて。高野山へ登り。刈萱道ゞと法号して塵を避。迹を埋。只顧仏ふ事る紙子の勢とちのくバ。妻子の愁嘆大〻ろのらゝ腹

まさなき家隷ハ時をうかゞふに奸計。蕙蘭繁らんと欲すれども風の為に破らる。泊船静ならんと欲すれども。浪の為に洗れてその子その家を嗣よしなく。その妻ハ室を守りがたく。遂に他人に横領せらるゝ事の為体を論ずれバ。重氏一城の主として。婦の妖怪を見て驚き怖れ。妻子珍宝及王位臨命終時不随者と大集経の一句を耳にし。妻子を棄城地を捐俄頃に出家入道して。高野山へ隠れつるの仏説によれとハいへど有りて道心なれども。先祖の為にハ甚しき不孝といふべし。凡禄の多少にかゝハらず。その子に嗣しめ。その孫に伝へ玉椿の八千代までも所領の地を失ざれ。官位俸禄ハ親にも倍せよとおもふハすべての人情なるに。士家にてある時もあるべきを。怪しきを見て怪しむ心に狼狽て頭髪を剪。妻や子ハ少きに。その成長をも俟ず。一人の主の馬が狂ひ出せバその尾

に附く。親族妻子。老黨ともに一意の馬が狂ひ出して家難ハ大かたならず。しかれども幸にして内室ハ操正しく。石堂孝心深かりしかバ。高野山へたづね行くを薬に。父の往方をしらんとて。一個の従者に扶引れ辛じて彼果山へ赴くに内室ハつよじく。積るおもひと長途の疲労に病臥て終にむなしくなりぬ。其志をつぎて石堂丸ハ。ひとり八葉の峯にわけ入り。今道心とて索ぬべきの剃るも今道心。一昨剃るも今道心。さらに分ちかねてや。逢ふことかなはじと孝子の誠と。大師の憐をもひけん。端なく父に環會し。年来のおもひを遂。悪人ともに討亡して。絶たる家を興すでありしかば家の褒れの物語。五説経の上におかれて。三尺の童といへども口吟ぬといふものなし。しかれどもこのものハたしかなる書にも見えず。と覚えつゝあれば一しかれど刈萱親子地蔵とて。既に古蹟を遺しこれバ世にありしにても疑なし。その

虚実をそしらずはなしけれ。出させたまへと手をとりて。ひきおこし席におし
居ゑしは石堂丸の古脚絆へ。迷惑さうに顔を揉み。つらく名をば石堂が脚
絆脚絆と呼るれど。全めづらしき刈萱法師の。一子なれバ。原は筑紫の
の向水郎が児なり。石之助といふものなるが。九歳のとき親に捨られ。叔父
の由縁によるゆゑに大和の五條へ出奉公。十年の年季を半勤し。十三よりの
春の季讃岐の金毘羅おがまんとて窃に主の家を脱出しけれど。途中にや
紀路にて路費を失ひ。象頭山へハ詣も果さず愚癡から高野へ来て諸
寺へいざつなき降りしが。備葷にあざ笑はれし或ハ高野山と渾名し。
又石之助とよばれて石堂々と呼る徒に寂衣なる人ハいと若く
ましきまでも。某が穿たる脚絆へ石堂丸が高野詣と書ましる
紙牌をつけ人とるのたりても憂旅の憂かりしとを忘るなと叮嚀に教訓

まへぐ。いつからかして敗葛籠の底へ納めてありしが。年を経て道人
もこれも。冥途の旅に赴きそうたるは変る世の中に。縁故をまするものなく。
遺る脚絆と紙牌をみて。好事の徒弥重し。これなん石堂丸が。
高野詣の脚絆なりとて。紫帛紗うやうやしく。二重箱に入まいらす。
価貴くなりしかバ。歴々の各位と。ひとつ質庫に膝をならべ。僥倖
らしき不幸も。恥といはねバ理をしるよしなき世の常言も今ぞ身に知ひ
あたえる懺悔話説面白やと。いひも終らず。逡巡さすれバ皆興さめぬ。され共
咄と笑ひしに当下見臺先生ハ眉をよせ。足を頓け。寔に彼がいふ如し。世
に秘ぞ。其の古器なれども。かゝる錯悞はいくらもあるべし。これに由て彼を名づくるに
に重氏法師の物ぐさも。世に伝るごとくにはあらじ。まる人あらバ説あれして睚
を学ばんかとひつ坐上をみわたせバ。臘塗の笥に蒔絵して。浅黄

縮緬の袖に坐しける。水晶の珠数をとり出し。呵々とうち笑ひ出家しける
者のありしが。其の虚実を論ぜんは。鳴呼がましき所為なれども。その
迷ひを解ざらんも。傍痛ければ。己これを弁ず。大人気なくも出するこゝへ
一遍上人の遺物にて。彼上人の一生涯身にはなたず所持したりしが。その世のことハいざ
しらず。往古の道徳たちのうへをさへよくしらず。彼鏡経を縁りける。
加藤左衛門尉重氏入道刈萱と。長銘打たる物なりしへ。これが主と憑み
なりし。一遍上人悟道のこと。新親法師が高野詣と。此彼撮合して
作り出せし中頃の小説也。その淵源を尋ぬれば。久明親王鎌倉の将軍
たりし北條貞時執権たりしころ。伊予国の住人河野通廣が二男に。
別府七郎兵衛尉通秀といふ武士ありけり。通秀ある時妻と妾とが
双六盤（或家名伝記は碁盤に作る）を枕として。臥をさし合して臥するが。その髻小蛇となり

て。噬あひたるを見て出家して。諸国を修行して智真坊と号す。徳行究て
高かりしかば道俗ふかく敬信して一遍上人と称しけるが。かくて一遍上人は。
伏見院正應三年。秋八月廿三日。摂州兵庫の観音堂にて。遷化
ましましける。享年五十一と縁起に見えたり。この別府通秀入道
一遍上人を。加藤重氏入道刈萱道心と作りかえたるなるべし。又刈萱道心の
子。石童丸が。ひとり高野山へわけ登りて。父を索るよしを作り出せし
は。新親法師がことを取れり。元亨釈書 巻之十四 に。釈の新親は七歳
にして父を喪ひ。十三歳にして。興福寺に入て相宗を学べり。時にその
母の疾ひと危きをきゝて落髪す。されども母の病愈ずして遂に
むなしくなりければ。偏に法華経を持念して父母の冥福を薦し
けり。新親と呼ばれしが。かくて新親は。六十といふとしに忽地に身まかりぬ。

二親不幸にして。世を早くさりしものハ。かならず外にあらじ。かし
又母後世の苦楽をしらざれバ。孝子の誠といふべからずと。殊に志を励
まして。やがて長谷寺に参詣し。通夜して七日におよぶ。およそ第三日の夜に
夢中に人ありて告ていふやう。汝父母の生処をしらんとならバ。すみやかに高
野の金剛峯へ到るべしと教しかバ。祈親夢さめて。ふかく悦び。夜の明るを
侯て。紀州へといそぎ。程なく登りて高野山へ参りけるに。弘法大師この
山を開き給ひしより。ここに八十餘年。堂宇既に頽廃して。荊棘路に塞
がると厭へども。幸にして塔所に到る。又祈るところもなきにはあらざりし程に。
有一日。観史の内室において。庭上に三茎の蓮花ありて。菩薩おのおの
二つの花の中に坐し給ひ。一つの花ハいまだ開かず。祈親拝して稽首
して。菩薩の名号を問奉れバ。対ふるものあり。その二大士ハ汝が父母なり。

この一ハ是汝が年来法華経読誦の感応としるべし。その開かざる一つの
花ハ汝が坐すべき処ぞと教給ひしかバ。祈親ハ感涙を拭ひ。ますます念
願成就しつと頼母しくて。直に此山に留り。勤めて荊棘を伐ちはらひ。堂を
修造を加へしかバ。荘厳もむかしにまさりて。世にいふ高野山の再興ハ実に
祈親が力なりとぞ。ここに祈親が七歳にして父を喪ひ。十三歳の時母も没
られバ。後生の苦楽をしらんとて。法花経の持者となりて。祈親と名
のりし。一年経て高野山へわけ登りて。父母成仏の瑞相をかんじしといふ。元享
釈書の説を密に写してかかげると。石堂丸が父を索て。ひとたびかの山に
わけ登るに。母公ハ中途に病死せしといふも哀に似たり。この孝子なる
名を石堂と名つけしハ祈親法師が塔所に到りしといふを思ひはかる歟。河
内の孝子ハ天皇の後胤にて。姓ハ越智なり。又加藤ハ弦守府将軍利仁

高野山ふ
石堂九
又せ索るところ

石堂冊

の後裔ふく。藤原氏なり。利仁の孫。吉信。加賀守ふ任ぜられしくべ。
藤原の爲ふ。加賀の加の字と冠しそ。子孫加藤と号ぎべ。その家も
亦異なり。又彼重氏入道と刈萱道ゑと名つけしは筑紫の地名ふ
象りて。菅家のもんの奇のところを思ひしるる欤。新古今集ふ菅原贈
大政大臣刈萱の関守ふのこそえつるは。人もあるさぬ道べなりけり。刈萱
の関は筑前ふあり。人もゆるさねそちべと詠せるひしよ。ふつて刈萱
道ゑが。その子石堂丸と名くるのぐら。名告あはざりしよ紙いはでかれば
物語の又母なるりは。祈祝法師と一遍上人のなるよあるべして何ぞや。
既ふその淵源を論難するとれは。石堂丸の脚絆とふりの。世よある
べうもあらぬ。彼刈萱の祝子地蔵は。別ふ所以あるとなりや。好事乃
りの。而為なりや。それもぞは考果さぬ。昔草紙物なるを似るりの。

あまりふ哀れよ。哀れとて。却人情とそう失ふもあり。ようや出家人なり
とも。その子はいとも孝ふ。なるくと。なるくと索ふるふ情なるく名告のあはで。
いつく物をもりはさるを。真の出家とはいはべらぬ。彼西行法師さふ。年を
経て妻ふも名告遭ひ。その女児と共ふも住り。又流書見墓子の論じ
ひ。所領の地を捨。妻子を捨。出家人となるとれは。仏の爲ふ忠臣
なりとも。先祖の為ふは不孝とも。とまは儒の道ふ。遮莫仏法は。
三孫断絶を宗ふて。生涯を食さるものなれば。仏の道へ入るんりの。妻子
とは爵禄ふ著さべよりや。形状は僧なりとも。ふざまは大俗ふ。かくのごと
ふて。得道世りのを。ようとは。西行上人在俗の日。出家せんとは思ひさぶめるふ。
僅ふ三歳なりける女児。父の膝ふ携つて。抱きんとて法よりれば。さぶるふとも
ようく宥へて。もべさちも孤さるが。佶とは思ひ入さ。凡出家の志を遂ん

盛衰記ニ高倉院位を退き給ひて建礼門院の御ニ人の半者あり

とて。愛情の絆を断ぜん。真の道へ入らんとて。嬰児を地上に投げ。雖ども家を出でゝ。走利火宅中の人を哀れんと。人情あるを笑へべけれど。仏の教へ後の紀を貴とし。又儒の教へ後の紀を不孝とし。彼是辨有るとかくのごとし。されば出て年を経て。その子ふ名告あへざるを。真の出家とゝ。あらば。彼弁長時牧法師が。嵯峨野の奥へ隠れ。美女横笛が尋ね来つるを。逢ざるとて。刈萱法師が。その子に名告あへざるを。聴りのおのく合掌して。南無阿弥陀仏と。南無阿弥陀仏と。

横笛刈萱と人の名告あへざるを共に容色あり

第七　平将門哀龍の襲束の上

浩處に上坐する。闇さかさうに坂東声して。朕は是桓武天皇第三世。高見王の嫡子なる高望王の孫。哀龍帝子を生て僅に六世。昭穆未遠ならば。帝子を出て

威を。新皇帝将門の哀龍の御衣なるふ匹夫下郎の散木どの。抱女夜発の馬骨ふが。朕を図さそ。りのしく。ふのうく浩るふ不敬なり。いと嗚呼と。と罵るとば。見基先生冷笑ひ風流の席ふ貴賤をうらば。況て田邊が主と牧を。将門ハ世を騒しうる逆臣なれども。身後ふその霊を宥らまゝハ。朝廷の恩澤ふ。そいとありがたき幸ひなるぶや。まづ問べきのとそあるど。不佞嘗。今昔物語神皇正統紀ふを閲して。徒れ門の紙まるといへども。その文省略ふて。つまゝ俗説を辨ずるふ足らば。又大境朱雀の段ふハ。ほさんとゝみどれ出まゝ。とのを記されうる。さるとば世よ伝るれ門が物ふうへ。尋ねふむし小説者の意近ふ。実るのぶゝゝうづこの二ッ三ッを問ん。将門當時。関左八州を掠奪して漫ふ偽号を唱へるぶら。平

親王と稱せしの。野人の臆断。見識卑しこと疑ふべきこゝのひいふ
将門よ。七人の陰武者あり。或いは将門分身して。七人の形状を顕せり。ようて
何ぞ真の将門なるべきの。有よ。秀郷竊よ人をして平親王よ美女を
贈らこと。を聞者とて。その真偽を探ゝする。瑳谷の動りの真の将門
なるべと告ゝんべ。秀郷終よ。こと。を射ておそくう。かくてその首級を京師へ
の。こと。て。梟首せられうしんべ。ある人こと。を云く。将門は来うとうぞ。切られ
ん。表意太がたうこゝ。とよゝ。とよゝ。とと。或は秀郷流りよゝく。
将門の妻と密通。その真偽をきるとものゝ。是疑ふべきの二ッゝ。或は
いふ将門元来謀叛のこゝろあり。貞盛こと。を猜して。殺んとするふ汎果ざ。
この比将門京ふあり。伊豫の純友と。比叡山よ来会して。平安京を直下し。
密よ逆意を相語ひ。といふこと。を疑ふべきの三ッゝ。或は秀郷。その始め

将門が武勇を愛て。その手ふ属ざやと。こひて。下総よ赴きて。対面するふ。
将門歓びて衣冠をも整ず。忙しく出迎ふ。言語應答ろよ。山ふ似ざ。ろづ
麁忽なりけ。とべ。秀郷こと。を。くく。その器ふあらざとて。微て下野へ立
帰り。更よ貞盛朝臣を副て。大切を立ようといふこと。を疑ふべきの四つ。
或ものいふ。えびめ太郎公連。将門を諫うねて死せり。こと。殷の比干ふ異ざ
といふこと。を疑ふべきの五つ。或ものいふ。将門退治の後。九條殿の沙汰ようて。
大将軍忠文将軍。忠舎ふ勸賞あるべきこと。を執しまうされるを。小野
宮殿強よ副将軍ふ功あり。と稱して。柱まうされんべ。□部卿のゝ此賞
ふ漏さう。面目なくて。内裏を退出るが。悪心を發ゝ。天も害地も崩
だるべの。大音を放て。同勅を蒙りて。朝敵を碎くふ。一人ふ賞を沼。一人ふ
漏さう。是便。小野宮殿の計ひなること。生く世を忘ざ。彼人の家門衰

黴して末孫永く九條殿の奴婢となるべしと罵りて手をもさと打て拳を把りけるに左右の人々の爪手の甲に徹て血流れ出ければ紅を灑ぐが如し宿所に皈て飲食を断て死を果して悪鬼となりてさまざま怖しき事ありけれバ鬼を宥むべしとて神に齋て宇治の離宮の明神と一しよに祝ハ是なといふ是或ハ忠文の悪鬼宇治の橋姫の神に合してさまざまなる祟をなしてけれバ圓融院の天延年間京師にて貴賎となく人多く失にけるとぞ。是疑ふべき事の六ツ也。此造ハ當時将門が身に著られしものなれバ其の為作ともいひ又もあるならん其下の虚実を辨論して夜こふも語りあかさバてよなき飲会にかへぞやかならずおのおの尊卑を論じ巧拙を褒貶して眼を瞪らし相罵る娯樂とせんとしとあるに出ものひねとのへバ件の勤装束呵々と打笑ひつ忽地に揺き出見其子ハこの席に在く博士と

稱せられけるが。かたハらの王にむかひ逆にハいかにかぞや。問るゝ所の第一條将門既に八箇國を討ち従へて。平親王と僭号して或ハ将門ハ新皇帝と稱しけり。されバ今昔物語にも。新皇とありて或ハ平親王とも称すと記されしハ後世の事なりけり。よりて世に将門の事の疑ハしきに書記しけるとかや後の人の小説なる事ハ実の事としがたき所ぞ多かる。又近属将門記といふ古書の世よりし人ぞ人その賛略とあれかるべし。件の将門記にハ朱雀院を本皇とも。本皇帝とも書して。将門をバ新皇と記しけり是當時の辭なるべし。あらそふ後の人ハ皇と称せんと憚ぬれバ平親王と称へるも。将門ハ親王にもあらん王と号むべき。凡五世の王ハ人臣に列りて姓を賜るが古例ぞ。又一世の王二世三世の王といふとも。姓を賜りしもあり。是ハ嵯峨以降

の源氏ふ妻ろう。又當今の皇子ろうとも。宣下ろのけまべ。親王とゝ
稱ーまゝ。既ふ親王ふとくをつーゝ皇子ーゝちふ。姓あるとろのけまべ。彼
將門ふ平朝臣の姓をとけて。平親王と稱ゝると。鄙俗の臆説。笑ふ
ふ堪ゝう。將門ハ東藩邊邑の人とゝいゝ。稍く京ふ入りて。執政の家ふ
庇從ーたまべかゝろうのうちゝ。ふあゝ。りーゝみづうら親王と偽
称せべ。平の姓ハ除去ろうゝ。新皇と親王と。奇相近けまべ。世俗説り
て。今ふ平親王といふ欲。とまも又まゝゝゝ。凡逆乱の臣とゝを皇と偽
上ゝまゝりしハ。道義を法皇と称ー。將門ゝまゝうら新皇と稱せーのゝ又
第二條ふ問ゝ。而の世ふ入七人將門ハ。七人の陰武者あ已ふあゝ。
又將門ふ家ーて。七人の形狀ふ。ふえゝせゝるあゝあゝゝ。將門ハ悪を佐ゝる
ものハ。權守與世王（従四位下村田王の男）孫原玄茂。多治経明。坂上遂高。藤

原玄明ふ入ろう。加以將門の庶兄平將頼。舍弟平將武。ゝゝゝ七人。
ゝの外ゝ。ゝゝく將門ふ考らゝゝ。故ふ國民ゝまゝらゝ。根戻ふ害物て。
七人將門と綽号せーのゝ。又小説ふ將門が真偽をまらんとゝく。貞盛
秀郷相謀りて人をゝて美人を贈ふ。この女子が告ゝるふとゝく。
蟀谷の動くゝりの形將門ろうとまりてゝれば。貞盛ゝまを射て。父の
讐を報ひ。秀郷その貢級を得ゝゝとのゝ。この小説を実ゝのとゝる
りの。下総の佐倉の河ゝとゝふ。ねゝ門山と唱ゝ。小山あゝ。この処ハ。往古ねゝ門が
討ゝまゝる蹟ろう。件のねゝ門ハ。美女ふ惑ひて本形をまゝれ。終ゝふ貞盛秀
郷ふ殺ーゝゝ。最期ふ深く彼美女を恨ゝう。その女が名を。桔梗前と
ろいひゝる。されべ今ふ至てねゝ門山の河ゝろふハ。桔梗生せゝ。化外ろ根を
ゝ已殖てゝ。土地ふ枯ゝとゝろう。凡草木ハ。土地の肥瘦寒湿の不同ふ

ろつて。壞ふあふとあへざる物あり。こゝ怪しむふ足ぶべし。これとる門の怨美ふ附会し。桔梗前といへる女をさへ作り出せしいと浅ましうるる侵淫なり。

とゝ。又秀郷朝臣ゞ門の妻ふ通じて夫の真偽を探りゐるうとといふ

説ハ今昔物語を板せし。注者の説なり。書を引ざれば。いよ〳〵信じ難し。

同書ふ将門ゞ岳士ホ平貞盛。源護扶ホゞ妻を拘て。新皇門ゞ

こそきつはんえーうり。こふ護扶と一人の名のやふ書写せしハ。偽写

の誤ふて。護ハ扶ゞ又ふく。将門ゞ軍兵ゝ拘らるゝ。ハ貞盛朝臣と。

扶朝臣の妻なり。又今昔物語ふ。ゝ門ゞ流せ。奇ゝを載て。

貞盛の妻の返歌を漏しつ。そのことも亦異同あり。ふ説ふ門ゞ美女

ふ惑弱して。遂ふ滅亡せしといひ。世俗も又その美女の名ハ。桔梗といひ

なんどいふハ貞盛朝臣の妻ゝ妻のことを誤り伝へるなり。将門記ふ

吉田郡蒜間の江の邊ふて。掾貞盛源扶の妻を拘へり。陣沃。又治承

明。坂上遂高ホゞ中ふ。彼女を追領ゝ。新皇ふとゝ聽て。女人の魂を

匿さん為ふ勅命を下さとといひども。勅命以前。夫兵ホゞ為ふ手ふ〳〵虜領

せらるゝ。就中貞盛の妻今昔物語ふ由ゝ。ハ妻と。縁ふハ妻と。剛とて。體と。鬱と

せんさなり。爰ふ件の陣頭ホ。新皇ふ奏さらく。貞盛の妻ゝ。容顔

卑しからず。願くハ恩詔を垂さく。ゝ本貫ふ遣しのとゝ。ゝ。

形皇勅して。女人の流浪ハ本属へ返さゝ。法式の例ゝ。又鰥寡孤独ふ。

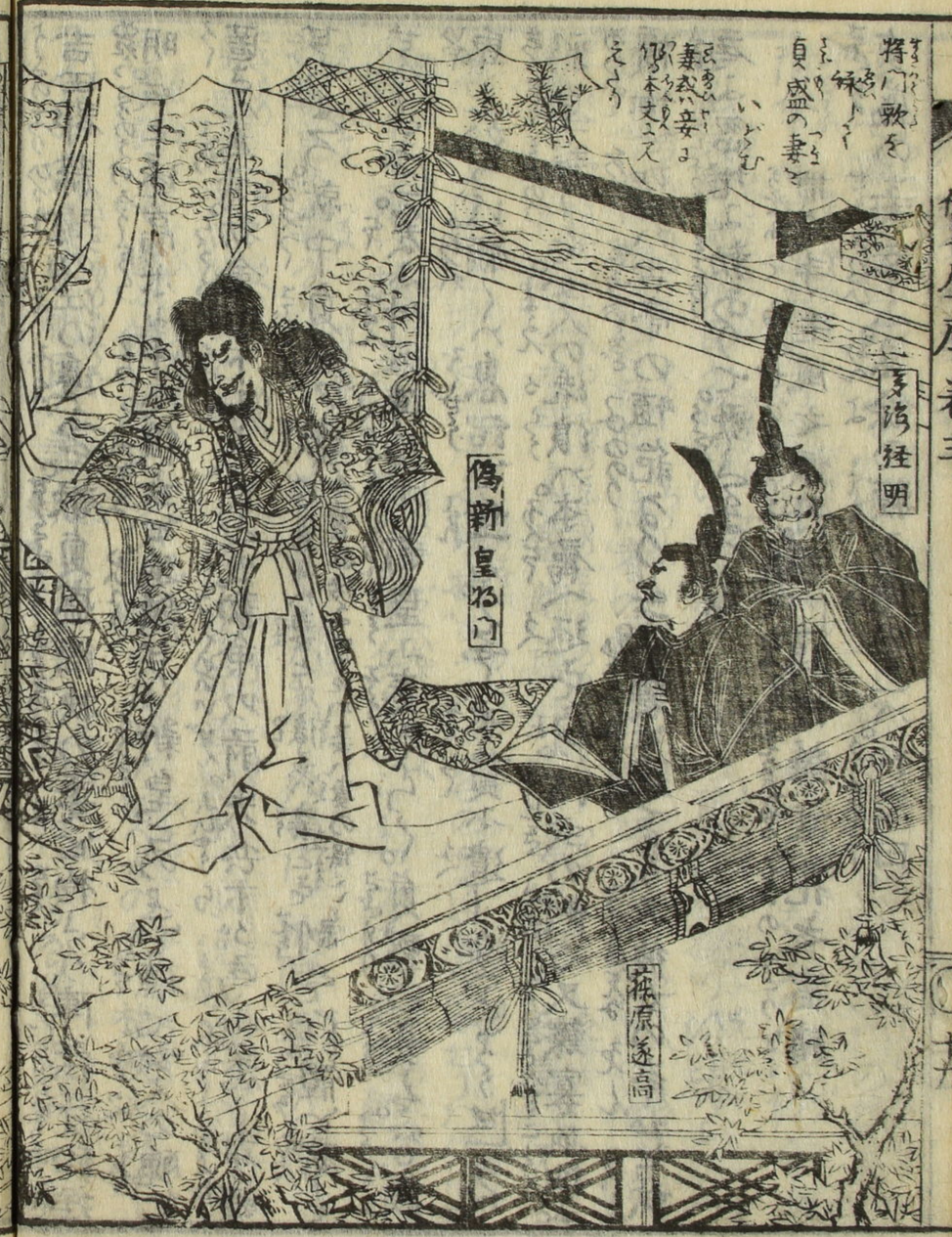
懼恤を加るハ古帝の恒範なり。とて。一襲を賜てり。又彼女の本ゝ。

為ふ忽地ふ勅あり。て。歌ゝ。まハく。

冊尓手毛風之便丹。吾□問技離垂。花之宿緒

貞盛の妻。幸ふ恩餘の頼ふ遇ぬ。べ。和之曰。

源経基妻
平貞盛妻


将門歌を詠じて貞盛の妻をいどむ
妻武士妾は仮名本文にえらう
偽新皇将門
平貞盛
藤原遠高

卅余年花旬。敬素者。我身和比志止。於毛保江奴発
その次ふ。源扶の妻。一身の不幸と恥て人ふ寄て。歌てゝくらゝ。
花散之我身年不成吹風波心年遭杵。物余佐利計面。
この言と既ぶの間。人ゝ和怡て。逆心御止ぬとえゝらゝ。この為体と思ひ
まゝとなるべ。魏曹操ぶ。冀州と攻とれ。曹丕真先ふ城中ふ進と
入り。遠熙ぶ妻ゐる既氏と掠て遂ふ后と為るふ仰らゝ。こゝてゝらの
古書ふ曲とれゝ。貞盛秀郷共ふ縛りて。将門ふ美女と抱ゝ。軍略と
懈せーといふ小説の源淵とまるふ足るゝ。つゝべきとの由受るふ。且ゝ
息と吹ゝとひつゝ。ぐて懐紙りて。額の汗と拭ひけり。

昔語質屋庫 巻之三 終